

地域研究

名寄市立大学援農有償ボランティア事業の現状 —学生アンケート結果の推移と心理的報酬強化の取り組みの観点から—

今野聖士*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：農業雇用労働力 労働力不足 援農ボランティア

1. はじめに

今日の農業において、雇用労働力不足が叫ばれるようになって久しい。かつては農村に豊富に存在した滞留人口は、農業の機械化・省力化（農業者がそれを望んだかどうかは議論の余地があるが）と都市の工業化と人口集中によってもはや存在しないと言って良い。一方で機械化が可能な品目には偏りがあり、北海道で言えば水稲作（田植え時期を除く）や耕種（小麦・大豆・そば等）、一部の野菜（ニンジン・ダイコン等）以外の作物ではいわゆる人の手による単純労働力が必要とされる。「その時」の農業経営だけを考えれば、政策作物と言われるような耕種・水稲作に傾斜することで、労働力の問題は緩和されうる（それでもなお、播種・田植えの準備・整枝や補植等、すべて機械化できているわけではないが）。しかし、地力（輪作体系）や政策作物に依存するリスク（政策転換による経営への影響。最近ではいわゆる「水活」の問題が表面化した）、単一品目への集中による天候・販売リスクといった個別経営の問題、また販売主体であるJAの取扱品目減少につながり有利販売が難しくなることや地域の特色を失うこと、そして何よりも経営上、販売単価が高く土地生産性が高い労働力投下型作物（主として青果物）の重要性は変わらない。そのためにはなにより雇用労働力の確保が重要となる。

このような状況下において農業者は雇用労働力を十分に確保するため、雇用環境の充実（主として雇用期間の延長）などの工夫を行ってきた。その結果、農業センサスによれば、2010年、2015年と常雇（7ヶ月以上の期間を定めて雇用する労働者）は増加傾向にあり（2020年センサスは設問の不適切な可能性があり、エラー値だと考えられている）、2022年度の国勢調査の結果からもその傾向が続いていることが示唆されている。すなわち、農業・農村を取り巻く環境の変化、特に労働力の減少と偏り（都市圏への地域的偏り・業種における労働力需給の偏り）によって、長期的（企業の雇用を含む）はもとより短期的な雇用はさらに確保が難しくなっている。全産業的にこのような状況が生じている中では、「農業を知らない世代（＝周囲に農業者がおらず農作業のイメージが出来ない世代）」が増加する中で、屋外作業・3Kを連想させる農業において、その被雇用者を十分に確保することは困難である。このため、被雇用者の農外流出を抑えるため、常雇化、あるいは社員として雇用することで、その労働力を確保する取り組みを進めてきた（当然、低賃金の固定化の懸念やキャリアプランを示す必要性など、別の課題が発生していることは言うまでも無い）。

しかし、青果物のような労働力需要のピークが激しい生産物においては、長期的雇用である常雇が全てのピークをカバーすることは出来ず、短期的雇用である臨時雇が求められる事となる。このためこれまで以上に多様な「労働力」の給源、例えば障害者雇用やボランティア等に注目が集まっている。中でも大学生による援農ボランティアの取り組みはこれまでも一定の役割を果たしており、今後ますます重要になると考えられる。

しかし、大学生に援農ボランティアを呼びかける場合、以下の課題がある。昨年度の本稿を参照しつつ改

めて整理したい。1つ目は大学生の属性への対応である。これは2021年度までの本稿で明らかにしているが、農業に関心・関係性のない学生の参加のハードルを下げる様々な工夫である（貸出や条件の確保、農家の意識等）。2つ目は2022年度の本稿で主として取りあげたボランティア／有償水準のバランスと学生の参加意識の関係である。これまで多くの地域で行われてきた援農ボランティアは、“無償”が基本とされていた。ボランティアである以上自発的な参加が基本となるが、農業は一般的に居住地から離れており、自発的な参加のためには移動手段を要する。このため定年退職者を中心としたコミュニティが援農ボランティアの中心となっていた（心理的報酬、特に保健リクリエーション効果であることが指摘されている）。一方で大学生は、移動手段を持たないため送迎を要し、送迎に係るコストを農家が回収する必要性が生じる。また学生の農業・農村への関心は個人差が大きい（所属学部に係る専門性の影響が大きいと考えられる）、ボランティアに参加するためのインセンティブが異なり、とりわけ名寄市立大学（以下「本学」）のような福祉医療系（≠農学系）では純粋なボランティア対象として農業を選択する学生は多くない。このため、本学ではボランティアによる心理的報酬を補完するため、有償ボランティアとしている。最低賃金に比する水準の“有償”をボランティアの範疇として良いのかという議論もあると思われるが、全産業的労働力不足下において、有償水準のみ（最低賃金水準のアルバイト）であれば、小売業をはじめとする身体的負担の少ない他産業に就業すると考えられ、本事業において最低賃金水準であっても多くの学生が参画し、また多数が継続して援農に参加していることから、本稿ではボランティアの範疇に含めている。

さて、以上のような状況を受け、2018年度から名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（以下「ケア研」）の研究事業として、援農ボランティア事業を実施している。2023年度も引き続きケア研、名寄市農務課、JA道北なよろ営農部、名寄市ファームサポート協議会からご支援・ご協力を頂き、学生からも有償ボランティアの協力を頂いて事業を実施した。本稿では本年度の状況を整理した上で、コロナ以降の比較可能な2022/2023年度のアンケートデータを比較し、本事業の現在の到達点について整理したい。

2. 援農ボランティア事業実施の経緯

本節では、昨年度の報告に引き続き事業実施の経過について今野（2019）から一部を引用するかたちで整理する。なお詳細に当たっては拙稿をご参照頂きたい。

2017年の春頃から、市役所・農協等農業を支援する立場の機関へ何らかの支援を期待する声が農業者から寄せられるようになった。また、筆者のところにも講義等で関係性をもった農家から労働力不足の状況や、学生アルバイトの募集に関する相談が寄せられるようになった。そこで、関係機関と協議の上、試験的に講義で関係性のある農家とのマッチングを試みることにした。結果、春夏期に計15名程度が農家アルバイトに従事した。極めて限定的とはいえ、20名近くの参加者があり、学生・農家双方から継続展開を求める声があったことから、関係機関と協議の上、事業実施を検討することとなり、2018年度に事業名を「名寄市立大学生援農アルバイト事業」（現在は名寄市立大学援農有償ボランティア事業）とし、関係機関にそれぞれ担当を設置した。大学はケア研（担当：センター企画委員兼本研究事業担当の教員）、市は経済部農務課（担当：課長）、JA道北なよろ（担当：営農部営農課長、アスパラ部会長、スイートコーン部会長）とした。大学は、ケア研が通常のボランティア支援に準ずる形で各種支援（問い合わせや募集など）を実施するほか、本事業をケア研課題研究として採択し、事業実施に係る費用の一部、また研究を実施するに当たっての費用を支援する体制を取って頂いた。また、市および農協等が構成員となっているファームサポート協議会から、学生が使用する長靴・作業着（ツナギ）・雨合羽の貸与を受けている。

事業期間は2期制とし、1期を5月中旬～6月下旬、2期を夏休み期間中とした。主な想定作業は1期がアスパラ関連作業、2期がスイートコーンやカボチャ関連作業である。

本事業を行うに当たって重要な検討事項となったのが雇用条件の統一である。一括して募集・マッチング

を行うため、紹介先農家によって雇用条件が異なることは学生の不利益になる。また安全面の配慮（危険な作業の禁止・労災等傷害保険の加入・送迎中の事故に対応出来る自動車保険の確認、雇用時間等）も万全を期した。

3. 2023 年度援農ボランティア事業の経過

表1に本事業の概要を示した。運営主体はこれまでと同様、ケア研、JA 道北なよろ、名寄市農務課で構成した。実施作業も同様で1期は5月中旬～6月下旬、2期は夏休み期間中（8月中旬～9月下旬）とした。受入農家戸数は1期14戸（昨年+1戸）、2期12戸（同+1戸）となり、2022 年度より若干増加した。継続して受入を希望する農家がほとんどだが、その時々々の作付・労働力賦存状況やこれまで継続参加していた学生が3～4年生となって参加できなかったことで数年ぶりに事業に戻る農業者もいることから、例年通りの動きと言える。参加学生数は1期42名（昨年+5名）・2期39名（同+1名）とこちらは2022 年度に比べて若干増加しており、受入を希望する農家数の微増に合わせた形となる。事業の安定化とともに、過年度に本事業に参加した学生が直接雇用雇用・援農ボランティアとして参加する形態が増加している。事実、本年度実施された「2023 年度名寄市立大学学生生活実態調査」によれば回答があった学生のうち約3割の学生がアルバイト先として「農産物収穫・選別」を経験しており、「一般飲食店」と並んで最も多くの学生が経験したアルバイトとなった。すなわち、本事業がきっかけとなって、学生と農家の関係構築が進んでいると想定されるのである。1期の有償水準は受入農家が事業開始前に集合して議論する「受入農家説明会」の席上にて検討される。最低賃金が920 円となり昨年度の900 円を超えたため、最低限とするか、より学生参加のインセンティブ向上のために増額を検討すべきとの声、逆に「ボランティア趣旨を重視し、労働力としてみたくない」といった声もあり、検討の結果950 円となった。2期も同様の討議により1期同額の950 円を基本とし、早朝5時開始の場合はこれまでと同額の1000 円となった。

表2に事業実施にかかるスケジュールを整理した。実施に当たっては、昨年よりコロナ禍の制限が緩和されたことにより対面説明会を1回ながら実施する事ができた。一方で全学生が必ず集まる機会が無くなったため（コロナ禍においては講義資料の配付が1ヶ所で行われていた）、筆者の講義を履修していない学生への訴求についてより強化していく必要がある。また従来同様、説明のための簡易な特設サイト・Google Forms を利用した参加受付と貸し出し品の集約といったオンラインツールによる広報、連絡を行った。

本事業の特徴である貸与品の貸し出しについては、昨年まで対面による随時貸し出しが出来なかったことから、学生ごとに袋詰めした貸与品を班ごとに並べ各自が回収する方法をとった。この方法であれば互いに拘束時間が少なくなることから、本年度も継続した。可能な限り早期に貸出品を準備するようにし、交換等を行う時間的余裕を設けるようにした。この5年の継続により若干

表1 援農(有償)ボランティア事業の概要

| | |
|------------|---|
| | 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（担当教員） |
| 運営主体 | JA道北なよろ営農振興部 名寄市経済部農務課 |
| 実施事業 | アスパラおよびスイートコーンの収穫・調整を中心とした作業 |
| 実施時期 | 1期:5月13日頃～6月25日頃の土日中心 2期:8月1日頃～9月20日頃(夏期休暇期間中) |
| 募集範囲 | 名寄市立大学 学生(学年問わず) |
| 受入農家 | 1期:14戸 2期:12戸 |
| 参加学生数(計画値) | 1期:42名・延べ246人日作業従事見込 2期:39名・延べ413人日作業従事(計画値)※注 |

資料:事業運営資料を元に筆者作成
注:参加学生数は当初の計画値である。実際は作業進捗や学生のスケジュール変更、体調等による調整があり、概ね8割程度の稼働率と見込まれる(主に天候の影響)。

表2 事業実施に係るスケジュール

| 日付 | 内容 |
|-----------|-------------------------------------|
| 2022年12月頃 | 市役所・農協と事業開始検討について協議 |
| 2023年3月末 | アスパラ生産組合全戸へ希望を照会 |
| 4月17日 | 農協と打合せ(実施最終判断) |
| 4月13日 | 受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定) |
| 4月24日 | 学生向け説明説明会開催・随時受付 参加学生向け特設説明サイト公開 |
| 5月8日 | 顔合わせ会 |
| 5月13日 | 1期作業開始 作業服・長靴・雨合羽貸与開始 |
| 期間中随時 | 参加学生(リーダー)より状況聴取、対応 |
| 6月上旬 | スイートコーン生産組合全戸へ希望を照会 |
| 6月26日 | 1期事業終了 |
| 7月13日 | 受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定) |
| 7月18日 | 学生参加受付開始(定員まで随時配置) |
| 7月26日 | 1期打ち上げ・屋外でジンギスカン交流 |
| 8月1日 | 2期作業開始 |
| 9月20日 | 2期事業終了・交流会中止(代替企画) |

資料:事業運営資料を元に筆者作成

の予備を含む貸出品が用意できるようになり、初回から貸出が可能になる一方、その貸出品の清掃・準備の負担が大きくなっている。試験的に学生アルバイトを雇用して貸し出し品の整理を依頼し、作業時間の削減を試みた。次年度も活用しつつ、汚れたヤッケ・カップの清掃方法等を検討していきたい。

また事業の実施に際しては、法的・本学の制限は緩和されたものの、これまで同様コロナウイルス等の感染拡大防止に留意しつつ作業に当たるよう、学生・農家双方に要請した。

これまで各期終了後に学生・農家が一堂に会した反省会（ジンギスカンパーティ）を行っていたが、コロナ禍では実施できなかった。単純な打ち上げ以上に、本事業の意義を再確認する貴重な機会であったため、本年度は1期について再開することが出来た。2期においては期間終了直後のスケジュール調整が上手く行かず、稲刈りの繁忙期に入ってしまったため実施する事ができなかった。次年度は早期にスケジュールリングするなど工夫して2期も実施したい。

最後に、近年取り組みを強化している運営による心理的報酬の提供について整理しておきたい。本事業では有償（最低賃金水準）による金銭的報酬と農家との交流・農業農村を支援したい、支援出来ているという満足感である心理的報酬を適切に組み合わせることで、他産業と比して作業環境があまり良くない農業において、最低賃金水準でも多くの学生に参加してもらう事が出来ていた。

有償水準を引き上げることで学生の参加インセンティブを高め、より多くの学生の参加を期待することは可能だが、この場合、農家負担の増大と金額に見合った作業能力の期待が生じ、ミスマッチとなる可能性が高まる。逆に心理的報酬を強化することは、繁忙期における農家にとって負荷が大きいほか、農家ごと（経営主や実際に学生に接する者の個人的能力）の差が大きくなるという課題がある。

このため、農家の直接的な負荷とならない形で学生の参加インセンティブを高め、かつ継続的な参加を促すような仕組みを考え、実施してきた。昨年度はその第1弾として「名寄市立大学 援農有償ボランティア参加認定証」の交付を行った。これは、各期における作業日誌のデータを元に、参加者が何回作業に参加したかをカウントし、名刺サイズのラミネートカードとして配布するものである。昨今の学生の就職活動においては、学業以外に力を入れたこと、いわゆるボランティア活動の有無が問われることがある。認定証を交付することで、そのような際に積極的に参加したことが証明される事も期待している。

本年度は12月の昼休みに交付式を実施し、希望者へ認定証の交付を行った。合わせて、各期ごとに参加回数上位10名程度に市内のお菓子等の詰め合わせを副賞として進呈した。またJAからも参加者全員に大福詰め合わせの提供があり、好評であった。併せて本学の堀川先生にご協力頂き、援農有償ボランティア事業のマスコットキャラクターを作成し、アクリルキーホルダーを作成した。これを記念品として学生へ配布した。1期参加者はアスパラ、2期参加者はスイートコーンを模したキャラクターのキーホルダーを配布した。次年度以降、継続して集めたいようなデザイン違いを作成していきたい。

このような認定証の交付を受けるためには作業日数の記入（提出）が必須となるため、これまで捕捉率が低かった2期の独自調整者が日誌へ記入するインセンティブとなる事が期待できる。捕捉率の向上がある程度あったものの、より全員からの回答をめざして工夫していきたい。

4. 事業の実績

1) 第1期事業の実績

表3に参加学生の属性を示した。1年生が30名・7割と大半を占めたが、2年生9名、3年生3名の参加があった。学科は社会福祉学科が多くなっている（相対的に男子学生の参加が増加した）。表4に単純集計した農家別作業従事回数を示した。全体で見ると5月はのべ121回参加（昨年-28回）、6月はのべ125回参加（昨年-15回）、通期ではのべ246回（昨年-43回）の参加

表3 1期参加学生の属性

| 属性 | 実人数 | 割合 |
|------|-----|-----|
| 1年生 | 30 | 71% |
| 2年生 | 9 | 21% |
| 3年生 | 3 | 7% |
| 4年生 | 0 | 0% |
| 男性 | 11 | 26% |
| 女性 | 31 | 74% |
| 栄養 | 7 | 17% |
| 看護 | 12 | 29% |
| 社会福祉 | 17 | 40% |
| 社会保育 | 6 | 14% |

資料：運営資料より筆者が作成

表4 農家別作業従事回数(単純集計)

| | 農家1 | 農家2 | 農家3 | 農家4 | 農家5 | 農家6 | 農家7 | 農家8 | 農家9 | 農家10 | 農家11 | 農家12 | 農家13 | 農家14 | 総計 | 農家一戸あたり単純平均 |
|------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|-----|-------------|
| 5月土日 | 12 | 20 | 8 | 8 | 9 | 11 | 4 | 14 | 2 | 7 | 6 | 6 | 3 | 5 | 115 | 8.2 |
| 5月平日 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0.4 |
| 5月計 | 12 | 20 | 12 | 8 | 9 | 11 | 4 | 14 | 2 | 9 | 6 | 6 | 3 | 5 | 121 | 8.6 |
| 6月土日 | 12 | 29 | 4 | 4 | 8 | 7 | 8 | 18 | 6 | 7 | 2 | 5 | 1 | 6 | 117 | 8.4 |
| 6月平日 | 0 | 0 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 | 0.6 |
| 6月計 | 12 | 29 | 8 | 6 | 8 | 7 | 8 | 18 | 6 | 9 | 2 | 5 | 1 | 6 | 125 | 8.9 |
| 総計 | 24 | 49 | 20 | 14 | 17 | 18 | 12 | 32 | 8 | 18 | 8 | 11 | 4 | 11 | 246 | 17.6 |
| うち平日 | 0 | 0 | 8 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 14 | 1.0 |
| ※参考 配属 学生数 | 3 | 4 | 2 | 3 | 3 | 4 | 2 | 4 | 3 | 2 | 4 | 4 | 1 | 3 | 42 | 3.0 |
| 1人あたり 作業日数 | 8 | 12 | 10 | 5 | 6 | 5 | 6 | 8 | 3 | 9 | 2 | 3 | 4 | 4 | | |

注:半日参加の場合も1回としてカウントしている

があった(日誌記入者のみ)。平日は講義の関係からほぼ参加はなく、土日が中心となっている。天候の影響により受入が実施されなかった日もあり、例年より少し参加回数の合計が減っている。また農家ごとに参加人数に差があるため、単純平均の意味合いは薄いものの、平均してのべ20名弱の学生が農家の元に訪れたこととなる。同じく表5から全体の参

表5 参加学生間の作業従事回数の平均値

| | |
|-----------------|--------|
| 単純回数平均 | 5.2 |
| フルタイム換算平均 | 6.0 |
| 最大単純回数 | 14 |
| 最小単純回数 | 1 |
| 最大フルタイム換算 | 12.0 |
| 最小フルタイム換算 | 1.0 |
| 合計参加回数(単純回数) | 254 |
| 合計参加回数(フルタイム換算) | 217.5 |
| 合計参加回数(全日参加) | 202 |
| 合計参加回数(半日参加) | 27 |
| 全日:半日比 | 7.48:1 |
| 残業有り回数 | 4 |

資料:運営資料より筆者作成

表6 2期参加学生の属性

| 属性 | 実人数 | 割合 |
|------------|-----|-----|
| 1年生 | 28 | 72% |
| 2年生 | 8 | 21% |
| 3年生 | 1 | 3% |
| 4年生 | 2 | 5% |
| 男性 | 2 | 5% |
| 女性 | 37 | 95% |
| 栄養 | 5 | 13% |
| 看護 | 16 | 41% |
| 社会福祉 | 9 | 23% |
| 社会保育 | 9 | 23% |
| 事務局調整 | 27 | 69% |
| 農家独自調整(貸出) | 12 | 31% |

資料:運営資料より筆者が作成

表7 農家別作業従事期間と日数(計画値)

| | A農家 | B農家 | C農家 | D農家 | E農家 | F農家 | G農家 | H農家 | I農家 | J農家 | K農家 | K農家 | 集計 |
|-------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| 5時～10時 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | 8戸 |
| 7時～12時 | | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | 4戸 |
| 開始時期 | 8/10 | 8/10 | 8/20 | 8/10 | 8/25 | 8/10 | 8/10 | 8/10 | 8/10 | 8/10 | 8/10 | 8/10 | - |
| 終了時期 | 9/20 | 9/5 | 9/20 | 9/20 | 8/31 | 9/20 | 9/20 | 9/20 | 9/20 | 9/10 | 9/20 | 8/20 | - |
| 従事日数 | 41 | 26 | 31 | 41 | 6 | 41 | 41 | 41 | 41 | 31 | 41 | 10 | 391 |
| 1日あたり従事希望人数 | 2 | 2 | 2 | 3 | 2 | 2 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 28 |

資料:運営資料より筆者が作成

注:数値は計画値である。実際は農家の都合、生育状況、天候、学生の都合等で上下があると思われるが把握していない

加状況を整理すると、学生1人あたりで見ると平均参加回数は5.2回(2021年度8.1回、2022年度7.8回)、最も参加数が多い学生で14回(同じく2022、2023各年度共に14回)、少ない学生で1回(同じく1回、3回)である。若干昨年より参加回数が減少しており、先にも述べたとおり天候の影響によるアスパラ収穫量の減少が影響していると考えられる。

2) 第2期事業の実績

続いて本項では第2期事業の実績を各表から述べる。まず参加学生の属性を表6から確認すると、1期と同じく1年生(72%)、女性が多く、学科は看護が多くなっている。最下段の「事務局調整」とは事業実施事務局が各農家に学生のシフト配置を行った(従前通りの)ケースである。「農家独自調整」とは、学生の配属と貸与品の貸し出しのみ事務局で担当し、シフト配置は各農家に一任する形式である。主に過年度の経験者が参加する場合に用いている(本年度は12名がこの形態で参加した)。次に表7に農家別作業従事機関と日数の計画値を示した。概ね30～40日間2～3名の学生の希望があった。作業開始時間は5時と7時があるが、5時が8戸と過半を占めている。表8に旬別作業従事回数を示した。把握率(回答学生数

表8 旬別作業従事回数

| (単純集計・回答があった分のみ) | |
|------------------|------|
| 期間 | 参加回数 |
| 開始から1週間(8/上旬-13) | 13 |
| 2週目(8/14-20) | 32 |
| 3週目(8/21-27) | 48 |
| 4週目(8/28-9/3) | 25 |
| 5週目(9/4-10) | 26 |
| 6週目以降(9/11-24) | 31 |
| 8月計 | 108 |
| 9月計 | 67 |
| 総計 | 175 |
| 従事日数 | 42 |
| 1日あたり最大従事人数 | 9 |
| 1日あたり平均従事人数 | 4.1 |

資料:運営資料より筆者が作成

注:数値は作業日誌に記入があったもののみ(30名分)を集計しているため、実際は上振れしている可能性が高い

／参加学生数)は76.9%である(表9も同じ)。参加可能枠(受入最大数)を超えることはほぼ無かったため、この表は学生の稼働実績に基づくものとなる。講義終了直後のお盆～8月末までが最も多く、最初と最後は帰省等のため参加数が減少している。最も多い日で9人が参加、1日あたりの平均参加人数は4名である。表9は個人別に参加動向を数値化したものである。補足した総参加回数は177回、最大参加回数は20回、平均参加数は5.9回である(概ね1週間以上を受付の基準としているため天候等による作業中止が多かったと推察される)。

表9 個人別作業従事回数

(単純集計・回答があった分のみ)

| 項目 | 参加回数 |
|----------|-------|
| 回答者数 | 30 |
| 回答者率 | 76.9% |
| 総参加回数 | 177 |
| 最小参加数 | 1 |
| 最大参加数 | 20 |
| 平均参加数 | 5.9 |
| 1～4回参加 | 43.3% |
| 5～9回参加 | 40.0% |
| 10～14回参加 | 10.0% |
| 15回以上 | 6.7% |

資料:運営資料より筆者が作成

注:数値は作業日誌に記入があったもののみ(30名分)を集計しているため、実際は上振れしている可能性が高い

表10 これまでの援農有償ボランティア事情の実績

| 年度 | 最低賃金 | 1期 2期7時 有償水準 | 2期5時 有償水準 | 1期と 最賃 差額 | 1期 | | | | 2期 | | | |
|----------|------|--------------------|--------------|-----------------|------|------|------------|-----|-----|------|------------|------------|
| | | | | | 学生数 | 農家戸数 | のべ 従事人日 | | 学生数 | 農家戸数 | のべ 従事人日 | |
| 2017(試行) | 786 | - | - | - | 15程度 | 5程度 | - | - | - | - | - | - |
| 2018 | 810 | 900 | 1000 | 90 | 36 | 11 | 計画値 | 112 | 31 | 8 | 計画値 | 319 |
| 2019 | 835 | 900 | 1000 | 65 | 49 | 16 | 計画値 | 291 | 45 | 11 | 計画値 | 530 |
| 2020 | 861 | 900 | 1000 | 39 | 46 | 14 | 計画値 | 323 | 37 | 10 | 計画値 | 225 |
| 2021 | 861 | 900 | 1000 | 39 | 42 | 14 | 計画値 | 350 | 22 | 16 | 計画値 | 272 |
| 2022 | 889 | 900 | 1000 | 11 | 37 | 13 | 計画値 | 289 | 38 | 11 | 計画値 捕捉分 | 351 196 |
| 2023 | 920 | 950 | 1000 | 30 | 42 | 14 | 計画値 | 348 | 39 | 12 | 希望人日 | 809 |
| | | | | | | | 捕捉分 | 233 | | | 計画人日 | 413 |
| | | | | | | | | | | | 計画充足率 | 48.9% |
| | | | | | | | | | | | 捕捉人日 | 145 |

※事務局調整分

資料:運営資料より筆者が作成

注:数値の計画値は計画段階での人日であり、実際は天候や学生・農作業の都合で上下している(完全には捕捉できない)。補足分は計画値のうち学生の作業日誌入力により捕捉できた分。希望人日は農家による希望値、うち学生を計画段階で配置できたものが計画人日。希望人日に対して計画上配置できた割合が計画充足率。捕捉人日は計画人日のうち、学生の作業日誌入力により捕捉できた分。2期は事務局が学生配置を調整する分以外に学生と農家が直接スケジュール調整を行う形態が一部ある(経験者のみ)。最低賃金は各年5月の値。

最後に、ここまでの試行期間を含めると7年分の実績データを表10として示した。俯瞰してみると、学生数・受入農家戸数・計画値は若干変動があるものの横ばい傾向である。一方で、先に述べたとおり学生の実態調査では3割の学生が農作業のアルバイト従事経験があると回答しており、本事業規模そのものの拡大と言うよりも、本事業が嚆矢となって直接雇用の拡大(継続)が進んでいると考えられる。次年度以降に確認していきたい。

5. 学生の参加意識の特徴

本年度も学生の参加意識の特徴を1期・2期それぞれ実施したアンケート結果を元に考察していきたい。昨年度より、より1期、2期のデータを接続できるようアンケート項目の見直しを行った。このため本項では可能な限り2022年度と2023年度を比較しながら近年の状況を俯瞰していきたい。

本年度のアンケートは1期36名、2期23名から回答があり、回収率はそれぞれ85.7%、59.0%である。まず表11に学生の農作業経験の有無を3年分示した。1期はおおむね7割が初めての経験であり、2期は1期経験者を含むため5割程度が初めての経験となっている。年次により変動はあるが概ね同一の水準である。次に表12に年別・期別の参加動機を示した。複数回答のため比率はMA比である。MA比とは項目の回答数を「回答総数」ではなく「回答者数」で割り返したもので、何%の学生がその選択肢を選んだかを示している。1期・2期ともに最も多い回答が「アルバイトとして」である。なかでも趣味など娯楽費としての参加が多いことが示唆される(どの年・期でも半数以上の学生がが選択)。反面生活費として考えている学生が

表11 期別・農作業に参加した経験の有無

| 期別 | 項目 | 割合 | 割合 | 割合 |
|----|-----------------------|-------|-------|-------|
| | | 2011 | 2022 | 2023 |
| 1期 | はじめて | 77.5% | 80.8% | 69.4% |
| | 一度だけ経験あり | 0.0% | 0.0% | 2.8% |
| | 数回経験あり | 17.5% | 19.2% | 19.4% |
| | 何度も経験あり(もしくは実家・親戚が農家) | 5.0% | 0.0% | 8.3% |
| 2期 | はじめて | 52.6% | 63.2% | 43.5% |
| | 一度だけ経験あり(1期参加者含む) | 15.8% | 21.1% | 17.4% |
| | 数回経験あり | 31.6% | 15.8% | 17.4% |
| | 何度も経験あり(もしくは実家・親戚が農家) | 0.0% | 0.0% | 21.7% |

資料:参加学生アンケートより筆者作成

4 割弱であることは、通年参加が出来ない事（学生から要望もある）や天候等による作業中止がある事の証左であろう。一方で農作業体験・農業農村への関心が各年・各期 60%以上となっており、本年も必ずしもアルバイト“のみ”の目的ではないことが伺える。やはり昨年も指摘したとおり「“有償部分”が主たる動機となった場合、「本事業はボランティアであるのか？」という疑問が生じる。しかし、学生にとって他に多くの選択肢がある中で（農業以外のアルバイトは天候による中止や早朝・炎天下の作業といった過酷さはない）、他産業のアルバイトとほぼ同額（あるいは若干低い）の水準においても一定の人数が本事業に参加していることは、学生の動機が必ずしも“有償部分のみ”であるとは言えない。すなわち、金銭的な有償部分による参加動機（やりがい）をボランティアによる心理的報酬が補完しうるからこそ、学生が参加していると考えられる。」との考察が裏付けられたと言える。

次に表 13・14 から学生の本事業に対する評価を確認する。まず表 13 では期別に学生が予定（想定）していた参加回数と実際の参加回数についてその差異を尋ねている。1 期は班体制・週末×1 ヶ月半であるため、昨今のアスパラ不作の影響を受けつつも半数が概ね予定通り（想定していた回数参加できた）と回答している（ただし 2023 年は 2022 年より予定外の中止が増えていることが示唆されている）。2 期は任意の時期に任意の期間参加する仕組みのため、参加希望期間が短い場合、天候の影響を大きく受けることとなるが、2022 年度は概ね予定通りとの回答が半数得られている一

方で、2023 年は予定通りだったとの回答が 26.1%まで落ちている。その理由は天候を中心とした理由によるものであり（周知の通り 2023 年は非常に暑い夏であり、異常気象とも言えるものであった）、避けられない部分もあるが、一定は作業を捻出する・作業がある他の農家に依頼する等の工夫を要すると考えられる（事業終了後の継続率に影響すると考えられる）。また、表 14 では期別に有償水準の評価を見たものである。2022 年度より最低賃金の上昇により有償水準も上昇しているが（前掲表 10 参照）、これまでの「非常に良かった」との回答から「良かった」との回答が最多となっており、1 段階下がっている。心理的報酬により「普通」以上の満足度が得られているものの（有償と無償（心理的報酬）のバランスがある程度取れている）、次年度以降、有償水準の向上あるいは心理的報酬の強化、いずれかの対応を検討する必要がある。

続いて表 15～18 から今後の意向について整理する。まず表 15 では年別・期別に今後の事業への参加意向

表12 年別・期別・参加動機(複数回答・MA比)

| 期別 | 参加動機 | 2022 | | 2023 | |
|----|-----------------------------|------|-------|------|-------|
| | | 実数 | MA比 | 実数 | MA比 |
| 1期 | アルバイトとして(小計) | 24 | - | 27 | - |
| | アルバイトとして;主に趣味など娯楽費 | 14 | 53.8% | 25 | 69.4% |
| | アルバイトとして;主に生活費 | 10 | 38.5% | 12 | 33.3% |
| | 農作業体験として | 18 | 69.2% | 24 | 66.7% |
| | 土日のみというスケジュールが都合良かった | 12 | 46.2% | 15 | 41.7% |
| | 個人で農業アルバイトに応募するより気軽だったから | 12 | 46.2% | 14 | 38.9% |
| | 農業・農村に興味があった | 11 | 42.3% | 13 | 36.1% |
| | 農家と交流してみたかった | 11 | 42.3% | 15 | 41.7% |
| | 学生同士で交流できと思ったから | 9 | 34.6% | 13 | 36.1% |
| | 農業に限らずボランティアに興味があったから | 8 | 30.8% | 15 | 41.7% |
| | 食・農を知ることで自分の専門に役立ちそうだった | 7 | 26.9% | 4 | 11.1% |
| | 農業を支援したいと思ったから | 7 | 26.9% | 9 | 25.0% |
| | コロナウイルスのリスクが低い活動だと思ったから | 1 | 3.8% | 0 | 0.0% |
| | 知人に誘われたから | 1 | 3.8% | 1 | 2.8% |
| 2期 | アルバイトとして(小計) | 14 | 73.7% | 21 | - |
| | アルバイトとして;主に趣味など娯楽費 | - | - | 12 | 52.2% |
| | アルバイトとして;主に生活費 | - | - | 9 | 39.1% |
| | 農作業体験として | 13 | 68.4% | 15 | 65.2% |
| | 夏休みの間で好きな期間というスケジュールが都合良かった | 6 | 31.6% | 14 | 60.9% |
| | 個人で農業アルバイトに応募するより気軽だったから | - | - | 6 | 26.1% |
| | 農業・農村に興味があった | 7 | 36.8% | 6 | 26.1% |
| | 農家と交流してみたかった | 5 | 26.3% | 9 | 39.1% |
| | 学生同士で交流できと思ったから | - | - | 4 | 17.4% |
| | 農業に限らずボランティアに興味があったから | - | - | 6 | 26.1% |
| | 食・農を知ることで自分の専門に役立ちそうだった | 6 | 31.6% | 6 | 26.1% |
| | 農業を支援したいと思ったから | 1 | 5.3% | 6 | 26.1% |
| | 知人に誘われたから | - | - | 0 | 0.0% |

資料:参加学生アンケートより筆者作成

注:各選択肢を回答総数2022:1期26・2期19、2023:1期36・2期23で除している。2022年2期のうち読み替え可能なものを2023年度の項目に当てはめている

表13 年別・期別・予定参加回数と実際

| 項目 | 1期 | | 2期 | |
|----------------|-------|-------|-------|-------|
| | 2022 | 2023 | 2022 | 2023 |
| ほぼ予定通りだった | 53.8% | 44.4% | 50.0% | 26.1% |
| 予定より少なくなった | 30.8% | 50.0% | 44.4% | 56.5% |
| うち天候以外が理由 | 3.8% | 19.4% | 27.8% | 30.4% |
| うち天候が理由 | 15.4% | 27.8% | 16.7% | 26.1% |
| うち天候、それ以外両方が理由 | 15.4% | 2.8% | 0.0% | 0.0% |
| 予定以上に参加した | 15.4% | 5.6% | 5.6% | 17.4% |

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表14 年別・期別・有償水準の評価

| 項目 | (比率・%) | | | |
|--------------------------------|--------|-------|-------|-------|
| | 1期 | | 2期 | |
| | 2022 | 2023 | 2022 | 2023 |
| 非常に良かった(早朝・労働の大変さを考えてもとても良かった) | 46.2% | 33.3% | 57.9% | 26.1% |
| 良かった(早朝・労働の大変さを考えても良かった) | 23.1% | 41.7% | 15.8% | 52.2% |
| 普通(早朝・労働の大変さを考えると普通の水準) | 30.8% | 16.7% | 15.8% | 13.0% |
| 悪かった(早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった) | 0.0% | 8.3% | 10.5% | 8.7% |

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表15 期別・今後の参加意向(比率・%)

| 項目 | 1期 | | 2期 | |
|-------------|-------|-------|-------|-------|
| | 2022 | 2023 | 2022 | 2023 |
| 積極的に参加してみたい | 38.5% | 36.1% | 26.3% | 47.8% |
| 参加してみたい | 15.4% | 38.9% | 10.5% | 34.8% |
| どちらでもない | 46.2% | 25.0% | 57.9% | 17.4% |
| 参加したくない | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% |
| その他 | 0.0% | 0.0% | 5.3% | 0.0% |

資料:参加学生アンケートより筆者作成

を尋ねている。1期・2期ともに今後も参加してみたいとする意向が概ね3割以上となっており、一定程度事業（とりわけ農家の対応）に満足していると考えられる。ただし2021年度は同水準で8割を超えていた期があったことから、前述のように有償水準あるいは心理的報酬いずれかの向上・強化が必要であろう。表16では期別に、仮に次年度も参加する場合、どのような目的で参加するか（参加動機）を尋ねた。複数回答であるため比率はMA比である。有償であることを反映して1期・2期ともにアルバイトとしての目的を選択した学生が最も多くなっている。一方で、2023年1期では3割以上の学生が農作業体験（農作業そのものに興味関心）、農家との交流、農業の支援、学生間の交流を理由に挙げており、これらが心理的報酬の目的であると考えられる。2期は2022年の設問設計の制限上単純比較は出来ないが、同様に農作業体験や農家との交流に期待する回答が多く、心理的報酬に対する期待値が大きくなっている。表17では期別に今後の事業展開に対する要望項目と特に希望する項目を尋ねた（要望は複数回答、特に希望する項目は3つまでの複数回答）。2022年は1期・2期ともに作業服の支給・有償水準向上が上位にきており、必須要件である事が分かる。3位以下は1期・2期で順位が異なり、1期は農家との交流、2期は作業期間の延伸があげられている。同じく2023年度を見ると、1位は有償水準の向上となっており、先の考察を裏付けるものである。3位4位は作業日数の確保や雨天時の対応、労働環境（夏期の暑さ対策）が挙げられており、昨年の状況を反映している。最後に表18では1期終了後の今後の援農・農業アルバイトへの参加意向を比較可能な4年分整理した。天候やコロナ禍の影響を大きく受けるため、細かい差を検討する意味は無いが、いずれも3割程度の学生が事業終了後に何らかの形で継続して農業に関わっている（関わる可能性がある）ことが重要である。ただし、2023年度だけをみると天候による影響で作業期間が短くなった事を受け、その後の参加意向が下がっている。天候により仕方ないと考えてしまうと、今後同様の異常気象が一般化する可能性もあり、長期的な対応を検討していく必要がある。

以上のことから、例年同様、本事業に参加する学生は有償ボランティアであるためアルバイトの代替としての参加動機を持つものの、それが唯一の動機ではなく農家との交流や農業への関心といった心理的報酬もうひとつの目的として参加していることが本年度も確認された。一方で有償水準あるいは心理的報酬いずれかの向上・強化が求められている状況も明らかになった。

7. おわりに

以上のように「名寄市立大学学生援農ボランティア」研究事業は、昨今の労働力不足下における労働力補完を主目的としながらも、心理的報酬による補完によって、金銭以上の価値を学生が持ち帰れる取り組みとして定着しつつある。そのためには、昨年の繰返しになるが、食農教育の視点を学生・農家両方が持つことが必要であり、単純な作業・労働力ではなく、多様な経験（農家との会話等も含む）をベースとした名寄ならではの体験・経験を提供することが求められる。とりわけ最近では、（本事業関連ではない）各種の学生向けアンケートにおいても、援農ボランティアや農家アルバイトという単語が頻出するようになった。特に単なるアルバイト先、としての捉え方ではなく、「地域とのつながり」や「貴重な体験」といった言葉とセットで語られることも多いことから、本事業が定着してきているとの印象を持つ。今年度の学生生活実態調査によって農業に関わる学生が増えていることが失されたため、次年度は、地域農業において本事業、また本学学生がどの程度寄与しているのか、農家側からの把握を行っていきたい。

本年も昨年に引き続きコロナ禍における影響を受け、制限した状況下における活動となったが、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター・名寄市農務課・JA道北なよろ営農振興部の協力を得て、実施体制を作ることが出来た。この場をお借りして、関係各位に深く御礼申し上げます。

本年度、北海道開発局が実施している「わが村は美しく一北海道」運動において、本事業が「優秀賞」を受賞した。重ねて関係者に感謝申し上げたい。

付記

本稿は、2023 年度名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター課題研究による「援農有償ボランティア事業」における成果の一部である。

「2. 援農ボランティア事業実施の経緯」は 2019 年度の筆者原稿から再校正の上収録している。初出 今野（2019）。他にも拙稿の各年次から引用している部分がある。

本研究は JSPS 科研費 22K05871 の支援による研究成果の一部を利用している。

参考文献

今野聖士（2019）援農ボランティア事業の実施に係る経緯と展開. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第 3 号（通巻 37 号）：31-40.

今野聖士（2020）援農有償ボランティア事業の運営実態と今後の展望. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第 4 号（通巻 38 号）：33-40.

今野聖士（2021）コロナ禍における有償援農ボランティア事業の運営方式と課題. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第 5 号（通巻 39 号）：17-26.

今野聖士（2022）有償援農ボランティア事業における学生の参加意識の特徴とその変遷. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第 6 号（通巻 40 号）：23-32.

今野聖士・泉谷眞実（2023）学生援農ボランティア参加の促進条件に関する研究. 農業市場研究 第 31 巻 4 号:43-51

今野聖士（2023）援農有償ボランティア事業における学生の参加意識の概況心理的報酬を補完する取り組みについて. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第 7 号（通巻 41 号）：15-22.

